

## 「間」と私たちの関係

白百合学園中学校 三年 堀川 莉里

「ニンゲン」という言葉を漢字にすると、「人間」という二字になる。ニンゲンとは私達「人」を指しているので、「人」という漢字が含まれているのは納得できる。しかしそこに何故全く関係のない「間」という漢字が含まれているのか。ずっと疑問に思っていた。しかしある出来事を経て、その理由が少し分かったような気がした。

小学校の卒業式を間近に控え、中学への期待で胸を膨らませていた頃だった。私は母とお喋りをしながら楽しく買い物をしていた。その時、いつもは音が消してあらずの母の携帯電話がいきなり鳴った。二人で突然の音に驚きつつ、「音を消し忘れていたわ」と笑いながら電話を受け対応し始めた母の顔は、一瞬で陰しくなり手も震えていた。いつもとは違う母の話し声に私も胸のドキドキが鳴りやまず、母の手の震えがうつつたかのようにじっとしていることが出来なくなるような妙な気持ちになった。電話を終えた母が発したのは、一週間前に久々に再会し、一緒に楽しく遊んだ方が急逝したという知らせだった。

その後、何が起きているのかよく分からぬまま慌ただしくお通夜や告別式に参加した。元気に笑っていた人がたった少しの「間」でこんなにも変わってしまったという事実が私を驚愕させた。亡くなった方の家族は皆泣き崩れ表情は絶望に満ちていた。しかし「間」が経つにつれ、その暗い表情は少しずつ影を潜め、それから約三年の「間」が経った今ではようやく家族にも笑顔が見られるようになっていた。私はその様子を見て、「間」が持つ効力に驚いた。

しかしこの「間」の効力がゼロと化す時が年に一回ある。命日になるとその方が亡くなった日から今までの「間」は無かったかのように、その方に関わった全ての人、深い悲しみに暮れる。私はその方の家族が笑顔を取り戻しているのを見て、「間」が長くなればなるほど、絵の具に水が足され色が薄くなるように、悲しみもどんどん薄まっていくのだと思っていた。しかし実際は時間の経過とともに悲しみが薄まることは一切なく常に心にあり、「間」が悲しみにそっと蓋をしてくれていたのだと悟った。

私たちの感情には必ず「間」が深く関わっているのではないだろうか。私はその方

にしばらくの「間」会うことが出来ておらず、しかも再会してからすぐ亡くなってしまった為、ものすごく驚いた。悲しみより驚きや衝撃の感情の方が強かったように思う。しかしまた違う「間」の関わりをその方と持っていたら私はもっと別の感情を抱いていたに違いない。そして同時に「間」があり、悲しみに蓋をしてくれるからこそ、周囲の者はなんとか立ち直ることが出来、先に進み続けることが出来るのではないだろうか。「間」は私たちが生きていく上で、感情と密接した重要な要素であるように思う。だからこそニンゲンという漢字には「間」という漢字が用いられているのかもしれない。

現に今も「間」と人間の関わりが目でも見えるような状況にある。新型コロナウイルスが蔓延し未だ終息できない状況で、我々人間は感染を予防するために他人と「間」を取るようになった。その「間」は「ソーシャルディスタンス」と呼ばれ、今では生活する上でそれはマナーでもあり、必要不可欠なものとなっている。

内面的にも外面的にも「間」がこうも私たちが生活する上において重要な関わりをもっているとは、思いもしなかった。やはりニンゲンの漢字に「間」という漢字が含まれていたのは必然だったようにも思える。

様々な面で「間」のもつ重要性を実感しつつ、もう少しの「間」<sup>アイダ</sup>だけ人「間」<sup>ゲン</sup>との三密を回避して生活していきたいと思う。